

1. 生まれた土地をはなれて十勝へ

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

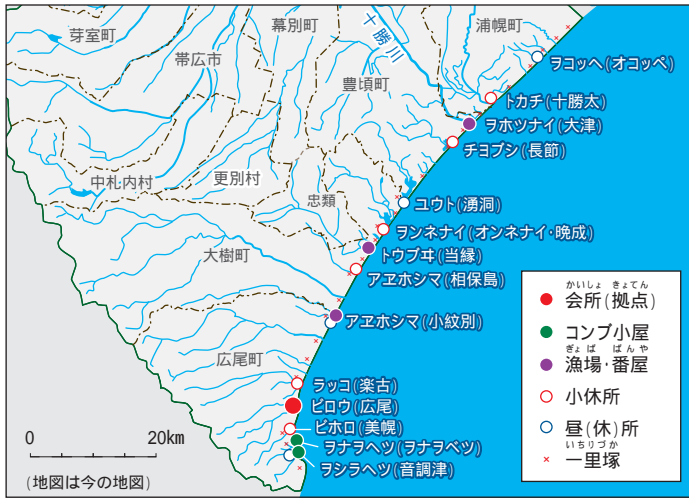
第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と今、そして未来へ

用語

さくいん

太平洋沿岸から内陸へ



1855年、トカチ場所にあった和人の施設。もちろん、これ以外にアイヌの人々の集落(p126)があった。(参考:「安政2年杉浦嘉七のトカチ場所絵図」井上寿)

江戸時代、十勝地方は松前藩により「トカチ場所」とされ、藩や商人とアイヌ民族が交易をしていました。17世紀中ごろまではトカチ(=トカチプト=浦幌町十勝太)が交易拠点となっていました。(p137)

その後、トマリ(=ピロウ=広尾)に拠点が移りま。18世紀末には、ここでしばらく暮らす和人が心のよりどころとして、弁天堂や神社を建てています。

18世紀末にはヲホツナイ(オホツナイ=豊頃町大津)にも、拠点が置かれます。江戸時代末の19世紀中ごろには、大津も発展を見せはじめ、だんだんと和人が移り住むようになりました。

明治時代に入ると、大津を拠点にして、多くの和人が内陸に入っていくことになります。



アイヌの人のところへシカの毛皮を買い取りに来た和人。(上徳善七が描かせた絵。ただし、上徳善七は明治26年(1886)に入植)(上徳善司氏蔵)

シカ狩りで十勝内陸へ

明治8年(1875)、十勝の産業(漁業や狩り)と産物を管理する「十勝組合」ができ、内陸でのシカ狩りがさかんになります。それを知った和人たちが管理をなくすよう求めます。勝手に狩りをする(密猟する)和人もいました。

明治13年(1880)、十勝組合が解散すると各地から和人ハンターや毛皮商人が来て(密猟も多い)大津は栄えます。しかし、とりすぎと大雪によってシカは激減しました。多くの和人たちは立ち行かなくなって十勝を去りましたが、十勝に住みついて農業を始めた人もいました。(p145)

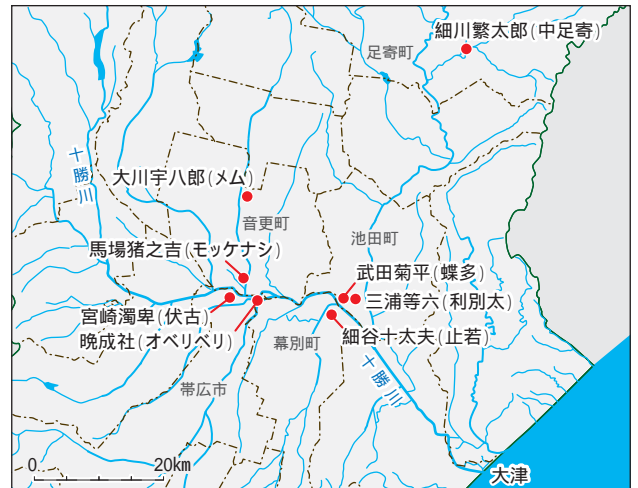
十勝内陸に移住した人々

明治12年(1879)には、馬場猪之吉がオベリベリ(帯広市)のアイヌ民族の長であるモチャロクのところに仮住まいしたあと、モッケナシ(音更町)に移住しました。

同年、武田菊平が蝶多(千代田:池田町)に、細川繁太郎が中足寄(足寄町)に移住し、また、明治13年(1880)には大川宇八郎がメム(音更町)に移住しています

さらに、明治15年(1882)には三浦等六が大津から利別太(池田町)に、細谷十太夫が止若(幕別町)に、また、明治18年(1885)には宮崎濁卑が伏古(帯広市)に、それぞれ移住しました。

そして、明治16年(1883)、「晩成社」13戸27人がオベリベリ(下帯広村:帯広市)に移住しました。(p143)



左に書いた入植者たちの入植地。(地図は今のもの)

1 大川宇八郎(おおかわはちろう): 岩手県出身、明治10年(1877)に北海道へ。日高地方で行商をした。明治12年(1879)山ごえで十勝に入り、十勝川を下ってオベリベリ(帯広)のモチャロクの家に仮住まいした。翌年、日高に帰った後、再び十勝に来た。

2 宮崎濁卑(みやざきだくひ): 札幌県によるアイヌの人に対する農業指導のために十勝に来た(p148)。農業指導は明治22年(1889)に終わるが、その後も住みつき、出身地である富山県の人をさそって開拓を続けた。

十勝内陸農業のはじまり ... 武田菊平の移住

武田菊平は、1828年、今の山梨県に生まれました。明治に入って函館にわたり、木材業などで成功しましたが、明治11年(1878)、火災にあって財産を失いました。

次の年、菊平はもう一度立て直そうと十勝にやってきました。当時、十勝のシカ皮やシカ角の商売は、かなり有名だったのです(p145)。

十勝にやってきた菊平は、アイヌの人たちとシカ皮の交易をしながら、かたわらで農業経営を始めたようです。場所は蝶多(池田町千代田)でした。

菊平は、明治16~17年(1883~84)ころには専業農家となり、およそ6千坪(約2畝)の畑を開いて、トウモロコシや豆、タマネギなどを栽培しました。

なお、菊平のもとに入地した鈴木久八の息子さんの話によると、「武田菊平というのは仮の名で、佐野が本当の姓」だということです。

菊平の農場には、晩成社の鈴木銃太郎も見学に来ています。菊平の農場が、和人による十勝内陸農業の始まりとっていいでしょう。

武田菊平は、明治18年(1885)に、58歳でその生涯を終えています。十勝に来て7年目のことでした。

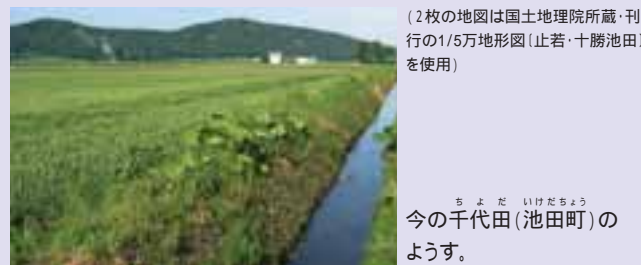


武田菊平は山梨で生まれ、函館で火事にあったあと、十勝にきた。



(左)明治時代の「蝶多村」。

(右)平成時代の千代田。



(2枚の地図は国土地理院所蔵・刊行の1/5万地形図(止若・十勝池田)を使用)

今の千代田(池田町)のようす。

もう少し細かいこと

チブ(舟)に乗せてもらって内陸へ

明治のなかばころまでは、十勝内陸部に広い道はありません(ただし、海岸ぞいの道は江戸時代終わりころからありました)。

アイヌの人たちにとっては、川が大きな交通路であり、道は丘や山など、水量の少ないところへ入る時に使われるものでした。(その後、開拓が進んだ明治30年代の和人にとっても、川は大切な交通路でした: p175)

十勝へ来た和人たちが内陸を移動するためには、アイヌの人たちの丸木舟(チブ)が重要な交通手段になります。多くの移住者が、この丸木舟の世話になりました(p129・p143)。

また、当時の十勝は、ほとんどがうっそうとした森とめった草原でした。初めてやって来た時には、アイヌの人の道案内なくしては、行きたいところへも行けなかったことでしょう。

さらに、家だっすぐに建てられるわけではありません。明治前半に移住した和人の多くは、アイヌの人の家を借りたり、ゆずり受けたりすることで、人ごちつけました。

そのほか、売り物になる毛皮や角を手に入れたり、川魚をもらったり、とり方を教えてもらったり、畑の手伝いをしてもらったりと、アイヌの人たちのおかげでとても助かりました。

明治2年、十勝に和人による地名がつく

明治2年(1869)「蝦夷地」が「北海道」と名前を変え、北海道各地の地名もつけられました。これらは、当時開拓使に勤めていた、松浦武四郎の考えをもとに決められました。

十勝は「十勝国」となり、広尾、当縁、中川、上川、河東、河西、十勝の7郡に分かれ、さらに51の村名がつけました。当時、今の陸別町と足寄町の東側は釧路国に入っていました。

地名は、基本的にアイヌ語の地名や河川名を漢字に当てはめたものでした。(国・郡 p157)(アイヌ語地名 p127)

十勝初の役場は広尾、そして大津に

このころの役場は、日本国から任命された「戸長」が取りしきるもので、「戸長役場」と呼ばれます。

明治13年(1880)、大津村に「十勝外四郡戸長役場」が、茂寄村に「広尾当縁両郡戸長役場」が置かれました。

どちらも、かつて「トカチ場所」があったころ、交易や漁場の中心であり、移住する人たちの玄関口となっていました。

ちなみに「十勝外四郡」とは、十勝郡・中川郡・河西郡・河東郡・上川郡のことです。(p157)

3 松浦武四郎(まつうらたけしろう):幕末の探検家(p142)、明治2年(1869)開拓使蝦夷開拓御用掛(かいたくしよぞごようがかり)さらに開拓判官(かいたくはんがん)になるが、翌年、開拓使のアイヌ政策に失望し、職をやめる。

4 釧路国に(くしろのくにに):足寄町の利別川にかかる両国橋(りょうこくばし:国道241号)の「両国」は、この橋が十勝国と釧路国をつなぐことから名づけられたという。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん